アセスメントポリシーに基づく検証結果（２０２５年度）

2026 年 7 月 28 日
内部質保証向上委員会

２０２６年３月１０日の特別教授会において、東京神学大学アセスメントポリシーに基づき、学修成果達成状況の検証を行った。特に、「在学中」「卒業時（後）」に挙げている指標に基づき、本学の教育効果を検証した。

（学部・大学院博士課程前期課程）

「機関レベル」「教育課程レベル」のいずれにおいても、本学建学の目的である福音主義キリスト教教役者の養成という目標に向けて、教育活動は適切に行われていると言える。

２０２５年度は、学部４年次在籍２３名のうち２０名に学位が授与され、２名が留年、１名（神学研修志望）が年度末で退学した。卒業した２０名のうち１５名が、伝道者となる召命を改めて認められ、大学院博士課程前期課程に進学した。進学しなかった５名のうち４名は神学研修志望の学びを全うして卒業した学生であり、残り１名は家庭の事情で来年度以降に日本基督教団のいわゆるＢコースで教師とされることを目指すことになった学生である。

また、大学院博士課程前期課程は、２年次在籍者１４名のうち１２名が修士論文を提出し、そのうち１１名に学位が授与された。修了した１２名のうち１１名がそれぞれ教会あるいは宣教団体に派遣され、１名は体調不良のため所属教団で静養・待機することになった。修士論文を提出しなかった２名のうち１名は休学し、もう１名は年度末を以て退学した。

このように、大学の教育課程、また大学の歩み全体を通して、高い割合の者が学位を取得し、また伝道者として派遣されるに至っている。もっとも、本年度は年度末に学部で１名の退学者があると同時に、博士課程前期課程においても２名が修士論文を提出できずに課程を修了できなかったが、いずれも、学力の問題というよりは本人の召命や健康状態に関わることによるものでもあり、一概に教育課程の問題であるとは言えない。しかし、どのように召命の確立に関わりそれを促すのか、さらにあらゆる世代の学生に対してどのようなサポートが可能であるのか、検証し、さらにできることがあればしてゆきたい。

卒業時アンケートにおいて、学位授与方針に掲げられている各項目について、学部及び大学院博士課程前期課程それぞれでどれだけ身についたかの自己評価を求めているが、どの項目も「十分に身につけた」「ある程度身につけた」の回答が多かった。とりわけ召命感の確立に関する問いには「十分に身に付いた」との回答が多い。特に、２０２５年度卒業生より、「授業、夏期伝道実習、諸行事等を含む東神大での歩みは、召命に応え献身を深めるために役に立ちましたか」とのアンケート項目を卒業時アンケートに加えたところ、「その全てが大いに役立った」との回答が多数であった。また、２０２４年度より２月に、在学する全ての学生を対象に学修行動アンケートを実施し、日々の学修行動・学習時間等の調査に加え、上記卒業アンケート同様、学位授与方針に示された各項目について、これまでの学修によってどの程度身についたのかの自己評価を求めているが、そこでも、概ね「ある程度身につけた」「多少は身に付いた」の回答が多かった。学生自身も、本学の教育課程

を通して、徐々に召命理解が深まるとともに、伝道者とされるための力が身につき、卒業時には一定程度身についたと自己評価していることがうかがえる。但し、卒業時アンケートにおいても、学修行動アンケートにおいても、「伝道者が現実に直面する諸課題・諸要求に、多様な協力関係の中で的確に対応する能力」（博士課程前期課程）については、やや自己評価が低めとなる傾向にあり、在学中にも卒業時にも、やがて教会や学校等に派遣されてゆくことへの不安を抱えている可能性がある。どのように、諸教会との協力関係の中で、将来派遣された際のことを意識しつつ学びと研鑽に励むことができるようにするのかが課題であるだろう。

それでも、日本基督教団の教会に派遣された者について、１名を除いて春季の日本基督教団補教師試験に合格した。さらに、２０２２年度に卒業して本年度に日本基督教団正教師試験を受験した卒業生８名は秋季試験で合格している（また、過年度の卒業生も２名合格して正教師とされている)。こういったことも、本学の教育課程が伝道者養成のために有効に機能していることを示すであろう。但し、これまでは数名の不合格者があった年もあり、卒業後の伝道牧会を通してさらに神学の研鑽を積み、召命に応えて確実に検定試験に合格してゆく神学の力を身に付けることができるよう、どのようにさらに卒業後のサポートができるのかは引き続きの検討課題であると思われる。

在学中の成績については、学部・大学院博士前期課程とも、ほとんどの者が大学院内部進学基準あるいは学位授与基準の 2.00 を十分に越えている。また、修士論文も提出した１２名のうち１１名が合格した。２０２５年度は、特別な指導の対象となる「学修に困難を抱える学生」（GPA1.90 未満、あるいは単位の修得に２割以上の遅れのある者）に該当する者はいなかった。それでも、2.00 に近い者やわずかに下回る者が数名あり、そういった学生がさらに高い学修成果を上げることができるよう、どのように学修支援の体制を整えてゆくことができるのかは引き続きの課題である。特に、日本語を母語としない留学生の GPA がやや低い傾向にあり、また、夏期伝道実習等でも、留学生による日本語での説教について改善を求められるケースがあり、日本語補講などを行っているものの、さらなるサポートが必要であるかどうかは、今後さらに検討すべきであろう。

博士課程前期課程の最終学年での履修を課し、学長が担当する「説教学演習 III」は、学部・大学院を合わせた伝道者養成課程の成果を測る格好の場である。２０２５年度の授業においては、聖書を読む読み方や、聖書を語ろうとする姿勢はよく身についており、本学の教育課程が有効に働いていることを裏付けているものの、昨年に引き続き、一つのテーマを首尾一貫した仕方で語る力や、文章を組み立て構成する力の不足はなお見られるとのことであり、さらに今年度は、他者の聖書の読み方をなかなか受け入れられない傾向が見られたとのことであった。

「科目レベル」については、授業効果調査（授業アンケート）において、授業が自らの召命に応える歩みの形成のために役に立ったかどうかとの問いには、今年度もほとんどの学生が「大いに役立った」「ある程度役立った」と答えており、授業が、引き続き、伝道者を育てるという本学の使命に概ね適するものとなっていることが読み取れる。授業の準備にあてる時間については、シラバスにおいて、１回の授業あたり３～４時間を目安とすることが明記されているが、講義系の科目は１回の授業あたり概ね１時間未満あるいは１時間から２時間との回答が多く、演習系の授業の中には２時間以上との回答が目立つ授業も

あった。ほとんどの授業について負担は適切であったとの回答であったが、どのようにその準備学習を指示するのかは引き続き今後の課題である。また、同様のことは、学修行動アンケートからも読み取れるが、本学の学生が、教会での奉仕の準備のためにも一定の時間をかけていることもまた読み取れ、そしてそれもまた召命に応えて歩むために必須のことでもあるため、どのように学内の学びと教会での奉仕のバランスを取るのかも、今後課題となってくるであろう。さらには、学修行動アンケートからは、アルバイトにかなりの時間をとられている学生があることも読み取ることができるが、学修に十分に時間をとることができるようにするために、経済面でのサポートのさらなる充実も必要であるかもしれない。

伝道者の養成は、教会との協力の下で進められて行く必要がある。本学では毎年「出席教会牧師と教授会との懇談会」を開催し、その協力関係を深めている。また、夏期伝道実習においても、実習先の教会から、実習した神学生の評価をしていただいている。例年、「出席教会牧師と教授会との懇談会」では、出席教会牧師から様々な要望や意見が出されてきたが、本年度は特に目立った意見はなく、本学とさらに深く協力関係を築いて伝道者養成に一致してあたってゆくことが確認されている。また、夏期伝道実習先の教会からの評価も丁寧にいただいているが、教会によって評価に多少のばらつきがあるとの指摘もある。いずれにしても、今後、どのようにして教会と一体となって伝道献身者を見守り養成してゆくのか、さらに相互理解を深める方法を模索し、協力関係を深めて行きたい。

（博士課程後期課程）

博士課程後期課程は、２０２５年度の在籍者は１３名、うち４名が留学のために休学した。同年度中の学位取得者はなかったが、１名が論文提出資格試験を受験して、１科目以外に合格した。また、１名が２０２５年度末で在籍期間満了となった。

博士課程後期課程の生産性向上は、引き続き本学の課題である。学位取得に至らないのは、教会や学校での奉仕の傍ら研究時間を確保することの難しさが主要な原因であり、それは毎年度末に提出を求めている研究報告書からも読み取れる。研究を奨励するために、毎年度後期課程研究発表会を行って２名に研究の発表を求めてきたが、本年度は発表できる状態にある者が少なく、既に研究発表を行ったことのある１名が再度、前回の発表以後に行った研究について発表し、その後、教員と昼食を挟んで討論した。

部門によっては、定期的に博士課程後期課程の学生と研究者による研究会を開き、共同での研究発表の機会を設けるなど、研究の奨励に努めている。

そのような中、論文執筆にかけることのできる時間を少しでも長く与えるために、他大学の例を参考に、博士課程後期課程在籍期間満了まで１学期以上を残して研究指導認定を受けて退学し、３年（長期履修制度利用の場合は１年）以内に論文を提出すれば、本学在学中の研究と指導に基づく成果であると見做して課程博士を授与できる制度が２０２４年度から導入されたが、来年度に１名がこの制度を用いて研究指導認定退学し、期間内での論文の完成を目指す見込みである。

今後も、制度の改善を含めてさらに何ができるのか検討を続け、「神学における国内外の学界へ学問的貢献ができる専門的学識を有し、高等教育機関において研究者また教育者として貢献し、教会や社会のあり方についての諸課題に深く取り組むことのできる」伝道者

を育成することを目指していきたい。